0-76

俳諧資料カード	
年代	
編者（筆者）	桐序
書名	桐序千句
備考	

エイス　（下垣内蔵）

呉市阿賀北五丁目二十二番八号
下垣内和人
電話〇八二三－七一－九八五四番
〒737

千句

何木

露しらく　梅の香寒し釣のいと

八之亭
桐序

宿かりのまゝみ長閑なる庭
将棊まては中々公家衆くさく
物しけ水よりおちくる
川ちやをまつ野に武
さしつ用心の加賀の使前
涼しさの夕へは梢にうつる月かな
草根ひたくる汁わくく

すめくに西之かむしの家
居とうし久しきしのまゐく
點をはいそむ様やかよふらん
りまして乃外風雅といし
来ることに一筆とさしなさまなく
おもほゆることは人のねきまかん
筆をとる者やこれ草乃庵

小きのわしかせき書く古の
非風二流れて各水を明らく
身をそんとて積み風雅共に世を
山とそし帰くとも明や遊びて
かなしきことにて居のか解し
世間の誰に者よる長文様し
何ともいつも武相伝しるし来

二

是より然んゆ霞く遠近く
停ゆし給ひこし人とまとふへ
都を出まして月のこかなよりも舟に
かゝりし中にも稲葉に立つ花
おしへの山は松を緑にまとひ松の緑く
ゆめのうらく若山の下に身
湖くとや津ひさく千とせに藤の崎

また舟中にありしも一つの松に
こし路月なきにも満汐に
こよくたにまは松風まんゝと
其藤く稲葉に末すゝ雁なく
あしの庭よくも何ゆうへうか
其に雅也夫の村く人に形の世
田のきちと〇の気もこふる秋

我ら上臈とよみて思ひしらく
りおおつらし労病おわりしき
未の時まで修羅きし山羅の苦
忍しとたゆるにまた山道
それより入る方にはなとこそ侍れ
地獄の釜やつまくれた
まして大つ雑々しいふべく

ゆきて後は梅の花ちりゆかん水
頭つやの為にそいう深くん
まつねとにつる月夜はまもさいはうら
また飛の蘿すさを鐘の音
屋ことやかすらに月またの風
松のふ本の木のはふくつくす菊さきしく
ハ月かね葉をもて横雨ふけ

せうしは静か暮水や淀むらし式
わし鹿は志らぬこゝろし嵐かな
物うきの二つ竹蒲萄野つゞらし
いくさまの和子軍藤吉しせ
大津之や石ぬつ月せゝ井二もん笛
さらしよ風に向うにけ
ゆ柳よく神木柳やみしかう世

水鳥もしゞ比よ浮ねん水
見えつゝいつ松江しく寺や厂
酬ゝ千里と中見女久留米
妹おとんにん月と東京しゅく
多なうつしてえんまりま当ま
懐まんつ江世めいつゝ松平
ゐのし当流れへの式

梯常は神にも世久安楽常まく
とくいふ度しかも流来かい
絶をまへ春いとのをいとの好楽に風
霊よりかい成来やらしのめ
前しもの扇に勢をもとるのえ
まじはりしくいとも人また健般を
法しものとも緑いとまこん

古井にも水は波もまよし
こゝるぬ村桜は風の月の色を含まく
田園の女は冬にも花
書間よりタ山しはちたはちも
とくまくも食られもれ来こそ男
猶しくて神やとして人に花の露
こは人ぞ遠生るとも表くても月に

蘆垣の垣ほ○いゆふしても伝へ
我身のうきはいつなるらんみちと
ゆくもあくるはなき志て弱るか
さしうかゐかりし八楳濃玉りしね
まだうきをし覚は御まし鉄まし
こらうれけりや麦川なん跡
海原の湿ても河なん十まし北年

日に入海かん天まこかん山
雲間もしりあ如と共しみ木のく
又り弱きあれ物まと婦らこ
弱まれましく流路のなしさ
身もこ雲し根りもとく
いとれ月人のかん楳かし
まらし小あかん中小り松まで

明年労免して遂に般若本
親しき人にもの(の)いさしし私
井の内に住みて命すて留守をく
舟にぞ出ん何をか明年の
花なき年は娘ならでは微笑をや
まつ労とりて一日もかよ
花さきよふや一つまでし退

かし帳はさかりを君か代まつ春

第二 朝付

はく一際はいつくり
御まなしなりまさりぬ

萩原の引金澄武し風
演川や当海の汀松杉く
わく流れてやゝ来しと
旅の秋姓月の後やみ
寒き去しやく夜と月影
店いつしゆまてゝまゝ露も
雅名露わらせ月御まし

こゝに伏暑林風屡音ありて下
さしまねく穂にまて夏をはらふ川
松本や麦の外やく道の式
月影入りしはよき蝉の声
夜ふけ難面人はまたし
新しく人も求め禅木はのゝ式
涼風まちて待しをしふ涼木

ゆふ二にて物かは暁の方の秋をし
世中と誰か安くは和歌をかう式
ゆくさきをさまてゝ紅葉はなく錦よ
かわもめ松本をいかに挽しし月見てく
まちあわせて人まよいしを
思ひもよらぬ人の中まつさしく覚
道津く嫁か風の萩恋

二

淵よりも堰て流る山の井の
たまおもしろみん逢まさる哉
水はうき瀬の手や淋しさ哉
まことは月よりは猿の日ける山の井
時なれば梓のいたよ般よ波雲
かつもふ古き路は晴とかくしき
新しと人は月か光は出し人

今はまつし眺め袖の紅しらと
花ちりては鶴の声も霰ふく
月にわかれ西の空から出て
春さくは鶯よりも藤見そ
なり朝の床に秋風そ吹く
さて置くは晴月に出哉
むかし都から出では嵐は一なし

桂月や橘鳥のから菊の花猿峰下
かりしとめ給ふ夕をまちおもむく袖
秋霧れたいらしめし傍と是文庫
ありし道ゆかは何しつこ亀武
若り作ら形りの荒茶芝掃く
則ちの川もおがみもつつきき
風流く虫取山水此今

縁ありしかば紫の花の外
青柳の風に吹乱るる夏のたて、
好き萩く八重桜も池式
夜なきくとさにさ花紫
にしよ為法もなる道は都の北
竹林にさとん西林破千金
三十余年さまし夢ともし候

人の身さはりなく立とかへりに来
りし人はあらし悲しく思ふや
つゝゐつゝとつゝかなくみめく
月は雲もなく名草[illegible]の海
此命しても藤原の行つく
まれにまて御無物[illegible]こ
紀[illegible]とく小松井[illegible]

関守とゝめさりし跡
唐人の藤原於[illegible]業平
けふよりもえぬ身の端をとゝまり
つゞく杖の津[illegible]思ひし下
いつしかにわかれ人の行衛も路
やさしきとき井筒の[illegible]のうつり
流されし初雁まち夜

秋もはこゝにわし　宴の中将く
月出て御所にて出　無程御出
御風のよ為にはいつく仕為とも
津ゝしく舟のゆ梶とりに
恵ませ給ひけし来ゐたる　末海も
よよたる　御足をらくしもうへ
保養し来なるの為　道すゝて

親のお咎めも中々とかく於なく
所の来る果は　良き為めにも参らん
我しもとゆるぬ　為せさして候
支けり　其書ては　梅さん出てへ参り
添へてしや出し　そうしほかにも
誰の分　御すまし　人谷た庵
外にも　料理とも　何にかも　米渡

ことに御所の東よりも北極の味に見
はつ行北は若菜湖しに
数まて之と申し指々居候
しつほ成の子とにし七さ之ふ
也よ申しまし人ニ人きへ見物く
いとまいらせ候ら○まいる成あしく
多く御なし新家申ても哀

来るまてにもしく御くらしを
公儀に隠家の間に候とかゝや
まつ月や枕もまたし遊
花行の縁く無縁ニ人
村めにはまた来るし候かへ
かゝる事とかしのめかは月影く
よし清に付し清き花葉

まだ花野の上は秋日まて
しら勢友のかわしらて舩出
哉命くるしき浦浪よ寒き水井
きおかしく影や細きより火
世書に禅との縁の高僧て
おもしろすゞしさんは思ひさ水里
つれとき けふんの第や見せて

さくいのまなは
花注連縄

行之

わしるこる人家のたゆみ男

山作久良

うらはしらなき人とも道

神無月上旬に京都出て

かり[illegible]妹のもとや丹波くにさ武

道のゆく蔭のかの[illegible]の音とて

ほし初音[illegible]故[illegible]かふ[illegible]く

気のつくみゐや明ゆ[illegible]樹[illegible]

いつ月をさかりし[illegible]尽し[illegible]乃[illegible]

谷川や奥ハ苔むす岩つたひ
そもかくて鳴る○かとよそ
峯の雪と雲や白妙
月とも見えし木の葉はかたみさて
松風ハ月すむ夜吹初て
都にしら雪松原の雪や降しき
深き谷道かりねの中にし

荻とかしこの道路や時しも
あはれと思ふ物ぞかし
と鞍馬の将人
山や高き事もなかりし人
文月はゝくまとを見る家
身を鞍馬の外に遠く桂の
所々を見てかくし夜の家

さらに北波の黄泉の門言よ
わしことになりぬ氷上
山里や杉なる木末の高櫓
志らぬ男の身を問部をさけ人
津なくも貴き流れに入りぬく
たゝ花すまさん下草をれきも
さぞかくは月余繕かへ当ちき

きりのかみよふるに小に継風を吹
うるかくは思ふの命を身を令
かかはなしゝ棲からつゝの
若葉さえふるふに心のよみの被
かりのふの草木も月
はぢしく面に北野をとりさし
雉のよ子人所にまん道

かつら川 佐保は紫にて名所
きよたき 梅や川 せり川し
あふみ紫の海よりも敷波は
鈴鹿 吉野の山ちかし さ
こし世ともしられ夜の枕なく
なれし袖ぬれ 露をかさねて
月の人の所も浪めし

みかしり 鶯の声またりふは
比叡の杉 久しき君をとはの声
しも紫 宮しかしみ ちかしの松
なひかりやまや 難波の葦原ん
とまく 風しきせ 浦浪
梓弓 出と出しは 長閑なく
むかしきり 鋸は 若せもまもれ

たのめつゝこぬ夜ことに待侘に
まことかりそめ神ならぬ玉章
御気色はいまそこに何かせん
月とあかめしきけれおほえ恋
恋のきまゝに物ぞ恋しく
物おもはしやつれなかりし哉
雲にすむ人にさそはれゆく村時雨

終は我しとこ身をこそうらめ
思ひ絶えはいつまでも仙ぬ人
ようとせと中かう時のかく
涙をの露おとこ身のたゞよひ
やよかつこそむかし鴫作り多
花ならの蝶はゆきて木陰の
なをおもひわかば柳かれ一時

暑き日ハ風の香やと光ゆらん
おもひにまかせのかくしと
波ハ浪の光とむすふく
せしい松か下坂さん山
志賀の海や浮世に乗くらん
花の下ヶ森せし一ノ下平
ほとゝきす海々白とたよりゆく

かくれ門田や先ヶ崎をハ武
蔵のかくれ村のありにて朝霧に
きりの立松ヶ山のふもとに民
衣ハ雑かきりしの桂乃あ
まれの中よ風やくさ乃秋
草乃葉の露に世と本縁下
ゆきも小笠おふかくしく

十
人義の初めは日本紀や
海しかりしを彼に保ちて
まことに学道の跡のことはりも
さと礼義衆のことはりおこりけるを
きはめて筆をもて教えことに雨より
さりやむかしの陰陽いと梅の香
はさかんなるしるしをもとめて初め桜

下間芙命にて棒けられ
皇御代くものかたは人に京
思ひしこしことに梅しき
月今月にもあまた春ならん
ふかきおもひ出しる光
雅故こそ礼かはる思ふ草
しみのきみのりまみ河かい

事ましいへし都ヶ峯ハ井能て
うしや世うりし端せ貝しき
存命いれいゐん主人来
神めりしやきハ朝へよの文
世にかく付よ虎土ハ母ハ無し給
手より海てゆきあう友
うまいき船よ山宗存の二郎ホハ

いよ候し根さす
まいる 御娘より

今さらにあはれ暮秋野記
生柳丈はや舞に月の下
露おちあかりや風おさまりて人
落鋪のなみこえしけしく米糸
まへしとことみ嫌おり川試
月と十五夜よりの外の深きつし
こゝに秋のや娘と物とそ武

山何

東ゝおまて一聲
いとこと郭公

ウ

未若葉は余所と出て○下
つれなん、まもよそにかく
今しほしも時雨の数は一しほ未
こなたいよいよ初もみぢ
濃くや色かはる人の思ひの
龍田ちり古き路まてかくの山錦
松ものこる雲谷の水波下

まかよふ 未さかり出でさぬら
白雨の御やしろに紅葉
家ここと風の香紅葉の
初月のこし舟出る、秋紅葉
身もし世のつらいなきみん
飛乃香は風の紅葉かく
よもとかなしののまも山の錦

酒ハとこそ有てハほとよく盃の始を呑
ほろ酔も又人あり小鳥くこ
天地の恵ハ何かもしらぬ人
却而夜明しつき来る沖の心ハ
涼しさに風かはる松葉陰閑なり
なれの好楽の上もなし
冬迎よ座入ぬ山為

寒し小春の月ハすさまし
いるるのもかかるる世やかしこ人
すきかたしし上かやま松よ出
見初るに心のしゆのとあやうく来
とやゆ上金の時のまた夢
最近さ酔の味しさ至まく
かしく浪まと闘ハ雲人

二ウ

沖津風吹上にしらし和歌

八十嶋かけてけふもまし

名の関守さへ見渡し保津

吉しのやま月ミ駒の身

蒼うミへと見る松

川の漢横判すへき

敷きや小中の月路人

けふへしらぬ名の道まで霜

松しま中まで由中し労絹川余

小家のつしみの事一山

金剛さし市分の飛但こし之

いかも守りしく人も春雨

若むらさ蘇いつく木庭武

あたし川のくも蘇の姉うま人

待花ハ夜寒むかひえし
何かはしらやかりかしく見
譲都留ゝ名と友の行儀く
あら氏さむし将まふまり男
春と秋なら花の盛もり一前
おい人祈き私も渡り人
心りとくさしく都ゟ別れく

残月なりり鐵ならて女房たち
待月ハ母とさく我名明ゟ
こうれ尾上や花をさ男都家
禅よおふの禅閣雲のゟく
いりまおゆ松よ松移花遊
姉ゟや迷つとて島鮮魚ゟん
そえし人まふ社と私しき

積みくさんしん川はさ徳余
二きしたがひ猶つきせぬや
いまし松かせ君にはしたがひと
こ身はつましまかせにとどし
父母は待つらん事たつこそ
梅さへ月日は夜の間にかきを
吾は帷がら藤の花さくところ人

きくのはまし余著ころ悲こし
秋冬はさこしめはやはらかく下
こ人来かく垂色さしやちる先
人心上下志こ身へしとかし
一葉ころりよし玉章
萩さよ助ころもののはこ悠に枝
こ度ましにかすむ山畑のたな

春も流るゝ水に伴く此時
菜あさる子ゝ夕川まんじ迄
心遠よ入江の村に人伴く
南まんの帰やぶしゝ加し
こく出く居は中ましへ麦の月
さゝ人のきまうろきもくたえ
忘れのことの果のにに桐まうし

いく越さ障にぞ又や出まこ人
ふく条とほつさとに法ある
おし男くのよや十ふに御佛
蘇は此お展まと謂こゝて下
うきに深や波のさとうし果し人
なとしふ人は身を加わる之謝
まりまと修ま人にけとし

うし春過みし夏秋何しせん
きしかたとこそはかりけれ
代々の君と常に祈る三笠山
まつや霞も幾緑り成る
関守の打とへしはこの浜
とぎしと寂の時来るもしは
日本たまう清き梅かえ花の露

ろう千二文字書
この
を
迎

其五
二字返音

是とハ平声と去聲
にて 権実

まゝ涼しくすむ事なし濁
弾もまんや様とハ云ふ事ぞ
ましき神まん木の如くに
してたる風の吹く声きけて
成るやうよの一切しまん音
其声をつらね、こゝろ残し
聞けるにも皆心を以

声ときけば徘徊として水のみん
其中の芝生草木滋まし
さらハ田草うつくく下高く
こゑ袖なをたかくし何処へ
うれかくすたへて出月のかけ
蕉の○うへにかゝれたまく
さ一露やまた人に一樹のかけ林乃風

その身には隠家をなして
白雪の人ならぬ所山乃奥
そよ何か思ひかゝりかこちまゝ
松虫しけき小萩か末
やらつしき實をもなし
雨露のもとに明かくれなし
いつかはりの人もかはりて人

心なきわかまゝく思ひ侍く
とまく川さと君ふくりしを
飄風とかしはりしくに世すてん
まゝ隣へとし見やきまら半庵
らかゝん月ともせ破れ木床
入江あれの世の田舎
尾花荻ありつゝかゝ苫に枕とせて

田面さしくしく物あわれる所
しらぬ事く人の中よふ一林
身のやまとをく隣めくもなり
たゝし飛驒人来りかけよしみ物成
あふ書くゝりあかとためや
まゝく世の事安きさへ不届也
なにしの身の在所書しるすへきを

暮はてゝ船に月出く
しほ(?)きはとくとしつきに
籏ふしゝ錦をまとかなる一里
よしふるしきたくへん
ながれ(?)行風の行よらし
かはかなき[illegible]ゝ猿(?)ゝ花(?)
草木の[illegible]蝶のまとかなく

月のかゝやきわたる船
わかるゝ人ゝ鴛鴦(?)橋板ゝかゝり
行くとたよりにまかせて鳥居を
世のうき人にゝかなつけても
さだめなき餘(?)情(?)ゝ哀し
三世やゝかけし御よはひ(?)を重ね(?)て
おくれぬ(?)蕨(?)の花のかなる

珍しことゝ無く出来鶴の為
ともに成すらて瀬田の志賀の余
及帰朝しては山のことえへ
奈良の月と共に名所も
秋の夜もすがら月に白雲かけ
りし秋もはれて後とくし
たのしみ世をかへの出羽

まづ先ハ竹の雪くもしや芦荻
冬の枯野ハ陽炎の菊の後すし
いつも水の中の寺の春けしき道
時鳥の初音を聞く人も帰く
よ所にて〇年積さへ聞ぬ
竜田山のもみぢ毎年の比
夜ごとつもりし枝折しこそ

然ハ今般こなたさまの御風木
まことに妹の御かたしかるへく
御姿のうちかたに末長く御
行末しく見てられ候のみ
おかけ様とおもひまゐらせ候人心
田舎のことなからへ心にて嘉
井のうちかへりに相の事極

ありかたく存まゐらせ候日にさへ御姉
すさまし候へ共あま御縁つゝけ候へん
さしく御こゝろ御姿の御中さ
我心おもひとおもはれ候ゆへ
さしく御こゝろと文にしたゝめ
一言のおしらせもつゝしみ
申し上候[illegible]まいらせ候

ナ
早蕨いもえと作れん山里丹
世をのかれしや昔く人かれ
うらあふ東屋にかくれかく
しれきまたと心とも庭番
ふる月の前能らふ更級や
身をしるらの風のあはれと
あはれ蜻蛉のはかなき枕

あか我いまや竹河まんとしう
をあはれ深草のみやもとめ
巻ハ念仏くまれあまる将人
さらしさく解とするちる蓬丹
かかくる法の書ちかへしと
筆に秋神道の奥の書の風
をし日たくこまと妙要者

大空林塔にまわりて氷ほとく
ふ月と盛なり月の宮けを
人のかとものれんのうちく暮
さしめし給まふ紫りとにかす
思布ませて候御殺なりしこめ
下木待ふ為とくせられ参
すみてかたへん上は紫のかしに御のを給はさ

とし十添書を
なしかたし御意

廿六

青何

秋の夕暮はくれ　小ゝ若

雁ゝ為て

あけそめて露ならぬ月濃下露

そゞろ寒き霰収稀に落る朽

あらしの音に猿閑かなし

またきのみね暮やさむくあらん

かすみの影はきやしきぬめり

まだ出る月の風に袖や梳く

かよふ人やみか川前まに道

枝しけし柴垣の外の明治望
来たよりよ風のたえし作
縁の無き母の形のしれぬ
たゝ身乃ほど旅労しけ来
世に継承の中の素物を相
謡ける小舟にわかれて泊り
命さへ惜きと思ふ住人

さりともと長の旅を高けき
日相暗くも行くし首月の
いかりきうおもふこれかる
残つ母さへもものの妹乃庵
こあし春よ夜へいかへ
春賀も葉もと登や所定めん
さらに都への道しるべかな楚

山深よ耳ことる鉢帰りゝ山
ま月けんとゝしまり来明け久
こ唐錦紅葉ゝに任りゝ紅葉
まゝんの本むゝる人梅しと
思ひまゝ情を月みまゝ緑よ木
八りゝいの夜と神やゝまく
河神替ゝゝ神楽殺をなりく

ゆくゝ金銀錦むま天
花一ふやとの果ゝ月く秋さん
きりと八重山嵐涌乃浪
秋雨まゝ月西初汐あ管ゝあ
まゝんや桜ゝいましへまん人
月この数鳴けんい道絶す
つゝ外と外ゝ葉々時やあゝん

耕作ハ、つとめて怠惰なく
し食をもしかるよ農の種蒔
耕し刈収より身を風にさらし
おりし着する笠蓑をもつて上
徒らしむ恐くてま世やすく人
家に年たらぬ筋行事和
すへて経て経何やら年

受しけ人ミにも人に
一りしてにかうありしも精なく
二本わ人の上乃あたり出精
人くとき志出来無く又望ミ家業
かおくし何事命のまとこく人
思し身ハ志し能ままかせく
常に食ハいとしたしつ

数寄の家居とこそ見えて水も流れ
樹もうちしげりは物さびて年久
庭も世を遁れ住給ふ御すまひ
と見ゆれうちに住居なりける髪
をおろしたる人の宿ともなし業のよし
いまだ若くてかくなりたるへと
おもひしる身の上は哀なりし世中

さしも見えや帝のおもひけん
艶にもよりて太政大臣の母
さやかにて見ゆる住居もの林
落ちいる水もとくしづまりて
まだ月もなし波もなし池中嶋
苔むせる緑にたち来すさみし人
の名さへもなし遊ぶ末のおもかげ

芦垣の一将をもて勢をよせ
打出し所々に旗をたてゝしつ
左右より兵を出して同しく毎
家々とこれを敵方の鉄はなち人
々川尻か寄て夜も昼も稲人
若者を防と御すれ共打かゝり
今もあり松の林風高たて

浦々川尻のいくさ更し出陣
誰もまつ乱すつきてゝしゝ武
者ともは川西にまつくそたゝて
人々にもとて栄へんのまゝにかく
行くとかや思ひける猶しましてゝ乱也
うかゝひ中にもふるしの志草
惟志のみこともなれん香天

十

二十年ハ道ハめでたし足をかく
あらそふかたもなし風もしづかにて
一葉ちる樹もなく木の枝をならさず
村里までも賑はしげにて
暮らしを君やむかしに月ごとに
いさ武蔵有くも千古津の月は
君が代久しき名を揚く

たかく登れる谷も長ぞ留
後つはものも天照の神
末のよハ夜鏡と鏡ハや
守り給ふ岩ハいとしく人のおし
代々の宮の中にも尤も尊き
五十鈴川水上きよくすゞしく神
かみこと御裳濯の久しき邦

今村ハい終日のやかなし
こゝろもとなく筋伸しさ
ソ秋の香木明け月照ハ清らかに
こまやかなるみは婦人正西ぎ
夜更て庭うちをも東風に余
ふみも入相の鐘きこゆ也静き
噂おとこ千里の友火翁林し

志は別ころこと
待しやうもつハ式

廿七

何心

いつ見ても人や

何ゝ明多殿

千種の秋さへ花をしく庄

我庵も秋萩も露と也し添つ

也しきれる心ゆらきぬきぬ

はなとこよみ庵の月影ろし

今よりとやらぬ音つまくれ

櫻将よし〳〵夜深き妹と人

書ぬ来末ともに夜嫁ぬ夢升

道ほそく一村ゝ若干さきにあ
いづかたも縁の常さらん
又おもしろき事のなかに世利く
ところ余依知春雲なしや
月かつらいつもめでたき道成へし
いまの言語よ神社林可縁
ありくのぞ白川の関まで

すみ川おもむかしく堀の如くなし
出づるやいはや居の方まで船早速
夜こそ舟鵜飼のさなか安蘇
いと秋の桂のをかし志ることも
人志しれのこゝろの事の続かし
大方の世の書きたる詞無
おもしろしくなしまさに未染けを

気格ふ定とゆしよろ冬のきく
形とく然は面白き傳し花
最後のう初めは一段と月ま
うしや人きわめし夜
浮様くはの附なる人ま
形の連衆のは十分に中高
都知く其身つ唯身にする

あるよく形と云て後しらし暮
雨もせく流す様とならぬ様
掲やうきる深く下ま十分らん
さりけれは道路にしほかる傳
小しの風の中七の一類
今は格式はしとしはしとしせい武
また人にこれは工夫教ること

氷りとけ夜ハいよいよふかく山寺入礼

月暁かましくまつ千もし白雲

行しま〇し遊門吉す原や丹波式

穀丹ちらのさかいまてく嫦

暁けむこ婦えの山の月雑する也

冬の風しま暮しまつ花の経

明白ありて行原あるはしらまく

いかにも月見る穂よや出来ても

あやかくは佛の前の寺々彼岸

たてりいさ〇きん月影

憂の秋の行さんはなしや那よ

ものかりまとハ木とりし夜

今はなし驚きんと世の物く

月に影よりの葉もて枝を

嬉しさは上きく初冬の所志へ
まかく伸しへ母は一羽子
未ワ双暑の日をや小露
青山の紅ゆかし月すや残さん
帰くも霜ぐ隠去ゆ寸
かゆ果へは去て別路
峰をぬく出そしつ縁の袖

ともしや出しく日の入空
文きを浮や若葉は月人
きれの果都西北面の稲虫
落ら小ち枝よ冬の比
水られ里世わく
幕もけきて世本もくは塘くすめ
しりにはちんなりけり水空

しく落すもとの仏母や去りけん
きはいまのよの其ためさへうき
浮田ハ惜しけれ縁と存す
ましきうち比月影あるさん
日ならずして伊せの花に下
神のくうちに身をさためしめ
何ごとく夜すがらやよの鳴く声

ゆくすゑ梅さく木の御代の春
寿しき堺の外まてもあやしき茶
ゐらせ上様明やうのそれさん
さし帰らうの舞の舟尽く
縁もなしとの事何もさらなく
うしや恋する歌よそよそのみ舟
ましく身に風をくく洞いやうつす

日数さへ別し旅すきの身る偽
くもりしや枕かはる本枯
こゝろをに流れ来る人の涙の露や袖の
秋の末のくれ露と消月代
何となく名舟の行衛上八く
なくし色なり秋の風吹し
海鳴のこの程は詠めし跡も

帰る来書く事は折せし
形見とそへ忠義の中は御殿へ参る
頼人と御くは知りしらせきや
道御ふ西の鳥の心よ此事
山はかしや涙まきあらはれ
帝の母北はかへし淑津川
からも花も咲く伐さる茶理

いかなる事何時は星移りて
こゝし風姻は井の桐の
暮り行西と得て鶴峰で
人我より松が山まで俯しを
之梓如くと旅ば路も恐ろ舟
いつ迄も暮の二つになりかは
背後を又は夜の間に春ごとく

さもれは暮に其しく
いくよしも山中蘇

すゝ
薄竹

みよし野ゝ山風しもよゝ葉に

一 ○ 夏されは夕暮まさる水
村雨の名残あらしき月しらぬく
みしかくたく火の影すゝ蛍
一夜は水ほくらし更まし
此はしはしと明の鐘明ゆ
庭にすゝめいつくに鳴らん
来秋を待えし労は藤のうら

ウ
打かゝる人也おもかけ川艇とよふこゝ
思ひし中に枝く住くゝ船さこ
月詠のいつゝか来ぬ寒月雪
まうれしくも銀に咄まして霜
思ひ寒Ｏにら行の影の旅おもく
今こそ無何もあまえ
去いふ月もうとしこ月繰

安かましのゝ村風まで旅
あくゝ月の雑事の水や錦衣
ゆくれのゆふ身を食下結ふ武
心とは野にはいし鶏ヶ城しらく
いつ銀やさりし秋白銀まで寄
かきりの主に又いくさ去る安や三人
色月中にほ霧るへ庭

並古すゝしの櫂を存まと
さしかはれはしとさそれす
一枝さきのこ出る女の所は
ゆんとききかわ深よせあるもの
夕霧の時月は公木丹
ようとく世すみさしは月右
網代守ゝ歌よも渡し明さん

いはひ水己そ麦のなみのあまた
五月雨は何の手なしに舞はく
さゆしく将せん板間よたとふ
なしも五たいは関居に經居し
しほく風荷耳らは御乃袖
木陰さへしらて雲積武書文操
としやさくらと秋川八市

氷さく霜にかくされては春
小田井の蛙や雨しきく庭の色
我らいやのさかなの昔の声
にしへしけき煙の後の秋
是厄のいみて神と神月
きりきは消え出さんれを
愚かなりと文読む身をも悔く

うつ前に銅は武士まで天地
折くの音やんもとかくきめん
同じまとかりし夕まぐ保保
中さしみしどか物の体居ある
もとみえさはいこしくよもかし
こゝに年入れ給ひし者
知らしを郡さ同し事や

まく本字の案かゝりは梅まて
神尾殿しの前のさくら林
為男の源と乱序にさかりける
さゆるは風の打場もよは雨
名来に判おゝく梅まん座参
又一と筋の道さまれかりくる
ことに鶴金早やかゝりは勤まん

月にうつる枝むすびとかや帰
林に送は渡かしは松や鶴よ
まもし山もゑみのさふらふ式
家ことまとかこふ小峯の戸柴乃垣
巻山とい頂まん敷りて老路
咲人数き源く風ま松重下
まちた盛りなるかれきおもとし

たゝ人や猿さしけ春桜ぞ人

わか行末と思ひしそ子分

色よき無き年の鳩影のよ哉と

きし孫の流や常にこほりせ

つく樹に山おろしのみ吹く風

わりけ何も庭に経歌の母

在近とやさしき人なし読人

残りなく緑やふところに武

行きし物思の返すは情なく

秋風に織りかさ錦まとひ

行く水に影すまし寺ゝに枕寝

月にのこりし流れは初下體

高松ならゝ紙のうち人清ゝ行

ふしの山みゆるしらず在道山

さて落葉より歳末に至るや梅かゝ人
まれにつゝしは御無異弁
色糸無く思ひしなかゝ時節祝儀
しかしけしは経かくいらし
ふと出入時分ましてく
かく成もに桜の節中先さく葉
御くや御秀の御来思候

志はかく聴き羽衣さしと
河将の芳状の自筆にかゝく
右に満ちの君のかゝし記
御ゝ外より成雑考ゝん
おゝかし親御ゝきくおかし
須鋪たるしはゆ月未雲
様ゝかし明やゝんは武

時雨月雪も初霜としくれけり

小枝し紛々帯はなれ下風

行やら栬松やや蛇の多いるん

おりきいこえ楼しこえ紅りせ志

明月やいつまて有まても花盛

おとこの心ましく陶雪待もん

長閑しこころ○し林とも春日和や

味は来りぬく

五月さもく古臣

すな
竹田

多楽しき太閤　演義彼かしら

都てゝ栄く漆にまかせ苗
船の葉なり日にの春深く
のしけきに花に中に月を望く
そもゝく座を生め御に良毎
月にうゝみのにも根まれ明ら養
立麹く笠ゝ旅く茂あ古本に
作の蕉侍花風もし小吉

う

いかにして源氏を責て討くたしく
なり尽しや此とて何落
落ちかゝり水の下に沈みはて二三
しかるにこれは平家とも
はかなくも経よ思ひとりて[illegible]
かくして月日とて兵郎が
物のふのあはれの[illegible]

今はかくての最後の時ハ
物をおもふさへ[illegible]
つねなきこの世の[illegible]
岩ほとて[illegible]
ふと浦は千鳥や波の[illegible]
風すさふ夕川かぜ[illegible]
かりそめの[illegible]

和かの様しとはしかさにいるまん
かとへ昌林けりかりきのよ
業の外は月にしき世の外ならず侍
めりしとふ物にいふしるをめや
こいふことまりし家来りし式
おほくは常に見るや志のよ
紀中にして紀の貫の文の萬なく

まこ満よりは何の風の跡しも
和しにて徳翁人やあらく遠みん
わかく捧さくり金銀なく
島の前とせ人しくのあしかく
しにて静き情ずや頼つけ
ふりてる志ゆしまるの生椛
そして札やら後余聞しうらやみと

捨ひ身やきり月のたゝく尤咲くし
さくら散るかけたるみ深き袖
傳え来し法もや国とおもふ人
ともに云ひしの跡を言ふ哉
去り逝きし中垣ちりぬ梅の香
昨の日もおほしきも明方
出るやつくゝ松のあかし

物いふ月きて下がる音たのまん
虫の夜をおもしろふ世丹
来たりたるしか久に清き
物かりくる古潤の鶯の声く
遂のかきとも月はふ月さん
誰とてもつまりて人も来れ
まつや春ゆかし清く絶る

三
龍田山の下水行舟人里
入とも月ゝかなしみを
松かぜやまつの風ぞかなし
かりねの人を思ふ絵と露霜
浅き心にかよふしぐれ哉
かなしさにさそはれゆくをかな
月かげとなりぬる身のうき人

いまはたゞ人もかへしはせぬ月はかなし
われながら心は月のすがたぞ隣のゆく
ましていかにくるゝ露のなど落合
風わたる秋のもみぢとぞ落ちてかれ
月にながめてかなしくもや声
いつの世に身をしる人は秋ぞ深
かゝる心をながむる重ね来き

出るを二親ハ離かたく
末は洛の人御供を天地
前古星此臣上の遠く舟に
海は尊中の街の詣りもを
人を志は大せ人の神社也
志のぼし身東鏡に名
月旅に折くはや閑に身人

身は入るに給之所沢
而て風に月多様に成く
いり松の色の恵にしく人
山鶴居し友に留とは見
うききとて玉松の色に
種蒔しツ若葉に咲くよくく
なまめりかるへ夫人まく下庵

漕さしゝあとよやこゝろへん
世を何とちる花を恵とすまま
旅しらぬやあふく神社
しくれきくとよ西行海つゝ
詣につゆ求人笛の浮の月
うき旅の神よ尾花ちる末
武蔵野や果の人道の方命て

をりゝ淋しくなる中に次思ひきさ
暮行くしまくと秋とは門道人
また行次に打しれ春命
植しより秋と夜船の床下て
見しゆめは真夜や都をまうさん
まて次三く冬は惜火りましゝ
稲かりかよ中より秋よ西風

拂へとも山のおくにも猶来
と毎りに出ゐかのうしろかも
かくても海の音に伝て
きしへ行て鳴て筝の第に寄
九重にせむかりのこゑしきに
猶よそや春の野にはしへつれ
鶯のまたもかはらぬ声を来草

山の奥まで
高間とよもし

第十

唐何

霜さよ石に庭
冬月か地は松蔭

冬は夜半ぞみに月し玉笹
こほれ出る浦波の行こと麦まきて
畑中やいそやは茶摘しける
り鳥の行は月よ浦伝ひ
中には行とまる春風のこゑ
たこに柳桜香作よ船胡
出くし要脈消てる吹呂

末ハ松さへかれてしきし水
残る志げみ堤清きて
まづみつらゐすれし山館にいのちかん
あをみしもし山志しらや
ゆかりの花紅葉にさへ門さ折く
小田井稲葉の下の虫とふ
ちるほど風の吹きわたる月

濱ちどり松坊松とんぼしさ先
又松構しるへき草溪菴
をりそめし友の稀にまて絶え
七十余歳にたらとし娘めく
身のさく記とかきしるす勝手
維摩し稀なるかな月に家はあら
うきせ正路にしも侍るも作

都へと心あくかれ給ふにつく
しのきさりし君あかしく
志賀より下る旅風のたより
都より入らせ給ふ比叡明より
松や白雲吉野大井川
嵐山河辺たのむかし
神垣やなかさくれなゐ天

志賀の都にかくれしもきえ
つくしの国の道をわか糸
まつ松や花のさき尽く風をと
月梢海岸の岫に霧立て
志しの舟こきわたす東雲の長浜
高砂の松とかたみのよそへに
しらくきにける藤なみ子

ゐゝ和歌をやかしは常にある田川
井堰やいつに浪のよ御ことゝ西
敷くみにふ木葉と氷縮く
夜さむはさへしたなき秋山里
埴くきく風の御こゑ明石浦
みかりに葉身をいとゝ細ことす
粉面りもよしやふくて佗中ず人

おもひ路かへり御もきて世の母
冬ごくいさよ月に命ぬるかな
またいつの流くやいとも花林
めくるてはかくへさ文ある筆
燈のもとよ風は色をと山下路
かへ本かえ新をあへさきをる人
かはき男は袖のよせ。道

年始にこそ年もあらたまり関郷く
ゆめく思ふ氷とく長し
春の舞浪くやまと舞万をと
閑話しも村ひとにむます
楼も更ふ潤し御とおく
おもむきにて寒月前を祝
さゝふ月をやどの梅かん

谷の間にたつ隠しまいかし
滝の響は御糸ならぬ紅葉とりそゝく
幸は初雁の山まかりて来
代しすさひて心あまり瑞と成
まくはありの薦と生之寿
東野はくほとふ事とや忘も霜
ちまかし一ゝし生きと取かゞは武

麻麦の花ざかりしく咲初て
いよいよ紫部立て稼毎に
気まうあやうく旅も今しき也
世のわれ路のをしめ色ある
琳あしく出でて柳陰は
入こ冬よし有明かりの月
上はうの家より苦ぬく身

おしかりにわすしくもかなと
いま勝も業の深きを思ひ出て
投しかつきにおくのうしまし
いかにとの身は深まりくるとすれ人
我のかうしと人のかの金地地
みるの能と世花しりや一盛
思はず小為と立ちて陰あり

十

外面にはるゝ寿林の寺遠く
瀬田にいてかゝる花橋の座
四ツ塚みや冷泉九折坂
叢河は東山やまの下流
茶は明恵の宗菊よし定て
花の中にも身をはる勝事や
竹の鶯の音の子のかの絲の小夜村

つゝみかは淀の大川下流
河鵜の森かね田の原に荻ありて
芦しか原の名所は人さま悲
こゝなし飛鳥にあな長東足ん
うき世外の中いとも歌人
今人の歌のかは月のいる月
桃源もやなれ奴楽の隠れ

姉やさそふらむやとくに神乃あま

人のよまくものおもふめと

知もれもしつせし梅林一言丹

ゆくさきかいの神まこそ城へ

承り風流く四方や新古乃論

求たくき松古成代色分たそ

世久我さいふ翁きかゆる天か下

千満ちをちふ

梅林のしけさ

追加　初何

都人も上る日はいちおもかけ

此色を花の風の道しるへ　春

天の戸もまた明かたの山のはに　西

逆が初行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

250